日本統合医療学会 会報
IMJニュース
No.29
2018年8月25日発行

編集･発行　一般社団法人日本統合医療学会広報委員会 委員長　川嶋みどり　URL：http://imj.or.jp/
〒981-0932　宮城県仙台市青葉区木町5-29　菅原ビル2-A
一般社団法人日本統合医療学会事務局　E-mail：imj@imj.or.jp　TEL：022-341-2410

特　集

理事長としての６年間をふり返る
ー未来型医療としての統合医療を目ざして

仁田　新一　日本統合医療学会理事長

前理事長の渥美和彦先生の後継として理事長を拝命したのが６年前であった。約10年にわたる副理事長経験から，「真の学会らしく組織的な運営を目ざしたい」と願って就任した私はまず，学会運営体制と事務局の改革に着手した。幸い河野明正事務局長は，40年以上の肝胆相照らす仲であり，ほぼ価値観も共有できていたので，スムーズにことが運ぶはずであった。だが，会員情報の処理，入会手続きとそれに伴う会計処理，会員への諸通知など，膨大な事務作業を円滑に進めるには財政面からも容易ではなかった。こうして約4年ものあいだの試行錯誤を経て仙台に事務局を移したのであった。一方，局長らの言葉に言い尽くせぬ程の苦労とこれを支えた学会諸活動等によって，ようやく会計が黒字に転じたことは誠に喜ばしい限りである。

昨今，社会のあらゆる領域での多様性が求められるようになり，医療も例外ではない。なかでも，心身面はもちろん，スピリチュアリティに及ぶ幅広い領域をカバーすることで，統合医療の価値が認められつつある。先に米国では，知識層からの強い要望で近代医学では対処できない領域を扱う統合医療に対する期待感が増しているし，本邦でもその認識と期待が徐々にではあるが，人びとのあいだに高まってきている。まさに統合医療の時代の到来である。IMJとしては，このようなニーズにいかに着実に対応するかが問われており，長年にわたって近代西洋医学を是としてきた国及び国民に対して，統合医療の真価を明かにし，これを提供する素地を創る必要がある。そのためには，統合医療の科学的根拠ならびに臨床的裏づけを明かにすることが必須であることは論を俟たない。すでにIMJでは，統合医療に適した新しい物理化学的評価法をはじめ，医学領域以外ですでに使われている社会科学的評価法やナラティブな評価法の開発を試みている。また，新しい評価法として免疫細胞の働きを可視化して統合医療領域に適用する研究がスタートしたことも心強い限りである。

さらに，この間の支部活動の活性化による会員の増加と統合医療の普及への貢献にも触れておきたい。支部は，それぞれの地域特性に応じてユニークな活動を展開しているが，この６年間に12支部から23支部に倍増し会員数も増加した。さらに今後も新支部が誕生する予定である。しかも，これらの支部は単独で活動するのではなく，九州ブロック，中国ブロックなどの広域なエリアで相互に連携して活動を展開されている実績は，人びとのあいだに，より身近に統合医療を周知してもらう機会のみならず，独創的な統合医療の成果を地域から発信する活動モデルの構築にもつながり，今後の活動をさらに期待したい。

ところで，IMJでは，今後も起こるであろうネクストクライシスに統合医療がどのように応じられるかを，この７年間の東日本大震災の被災支援，熊本地震さらには西日本豪雨災害で得られた貴重な経験

をもとに委員会を立ち上げた。東日本大震災は，私の理事長就任１年前に起こったが，最も甚大な被害を被った宮城県は私の出身地でもある。折しも，渥美名誉理事長を始め川嶋みどり，小野直哉理事らが生々しい被災現場で呆然と立ち尽くした姿は，今でも強烈に私の脳裏に焼きついている。直ちに会員の消息を確認し，ヨーガや鍼灸など，有志らによる活動が展開されIMJの存在を示したことも記憶に新しい。以来，大災害時の特に慢性期の被災者の心身に寄り添うケアを，現在までも続けていることは，大災害時の統合医療モデルとして後世に残るものであろう。

なお，このニューズレターも私が理事長就任とほぼ同時にスタートし，定期的に発行され随時会員に興味ある情報を提供する媒体として続いて来ている。今後も会員相互の意見交流の場として，その歩みを絶やさず継続していただきたいと願っている。

任を終えるに当たって，IMJの前身のJACTが1998年に渥美理事長のもとに発足して以来，世の中に統合医療が認識されるようになったプロセスを陸上競技の三段跳びに例えてみよう。すなわち，渥美名誉理事長の業績は「ホップ」であった。それを引き継いだ私の時代は「ステップ」であり，これからの時代は大きく飛躍する「大ジャンプ」になるであろう。私としては，その素地は十分に作ったつもりである。次の時代には国際貢献や会員構成の拡大，会員の熟成などがこれに続き，多くの人びとのあいだにその有用性が周知されて，統合医療が未来型医療になることが約束されるはずである。

学会員各位のたゆまぬ研鑽を期待し，賛助団体の皆様の変わらぬご支援を切に願うものである。

トピックス Topics

第22回日本統合医療学会学術大会のお知らせとご案内

｜猪股　千代子｜
第22回日本統合医療学会学術大会大会長
札幌市立大学看護学部教授

長かった酷暑もようやく一段落し，空も秋色をおびてまいりましたが，皆様，お変わりございませんか。

北海道で14年ぶりに開催されます，第22回日本統合医療学会学術大会の成功に向けて，組織委員会をはじめ，関係者一同で，最後の仕上げに取り組んでいるところでございます。数多くの方のご厚情に支えられここまで歩んでこられました。貴重な経験をさせて頂き，心から感謝を申し上げます。

豊穣の秋，北海道の大自然のパワーは皆様のこころも身体も充分に癒やすことでございましょう。

何卒，第22回日本統合医療学会学術大会にご参加をお願い申し上げます。

「第22回日本統合医療学会学術大会」概要

（2018年７月30日現在）

会期：2018年10月7日(日)・8日(月・祝)

会場：札幌市立大学桑園キャンパス

組織委員会（敬称略）

名誉大会長：仁田　新一（IMJ理事長）
大　会　長：猪股千代子（札幌市立大学看護学部教授）
副 大 会 長：西谷　雅史（IMJ北海道支部長）
組織委員長：関　　利盛（市立札幌病院院長）
事 務 局 長：大野　夏代（札幌市立大学看護学部准教授）
運 営 会 社：イー・シー・プロ（札幌市北区）

大会テーマ：大自然と響き合うインテグラティブ・ヘルス―慈しみと現代・伝統・自然医療のシナジー

プログラム：

Ⅰ　講演（９題）

○理事長記念講演（10/8）「IMJ理事長としての6年間」仁田新一（日本統合医療学会理事長）
○大会長講演（10/7）「ケアリングと癒しの統合医療看護の探究」猪股千代子（札幌市立大学看護学部教授）
○特別講演１（10/7）「人工知能とインテグラティブ・ヘルス（仮）」中島秀之（札幌市立大学理事長・学長）
○特別講演２（10/7）「わが国の統合医療政策」厚生労働省医政局総務課：統合医療企画調整官
○特別講演３（10/7）「未来の日本の統合医療構想」伊藤壽記（大阪がん循環器予防センター所長）
○教育講演１（10/7）「地域・医療に活用したい精神的ケア/ヨーガ療法の実際」木村慧心（日本ヨーガ療法学会理事長）

○教育講演２（10/7）「統合医療の発展形態としてのアントロポゾフィー医学」堀雅明（ほりクリニック院長，アントロポゾフィー医学国際認定医）
○教育講演３（10/8）「まごころのケアを支援するデザインの役割」蓮見孝（札幌市立大学特任教授）
○教育講演４（10/8）「災害時におけるオゾン療法―過剰酸化ストレス状態への効果―」上村晋一（阿蘇立野病院理事長）/松村浩道（江の島弁天クリニック理事長・院長）

Ⅱ　シンポジウム（4題）

○シンポジウム１（10/7）「がん統合医療最前線」赤木純児（玉名地域保健医療センター院長）/岡本正人（大阪大学）/武田力（医療法人協林会大阪がんクリニック）/照沼裕（医療法人財団東京クリニック）
○シンポジウム２（10/8）「死生観とQOD」カール・ベッカー（京都大学「政策のための科学ユニット」特任教授）/木村慧心（日本ヨーガ療法学会理事長）/金谷潤子（医療法人札幌手術センター札幌麻酔クリニック在宅医療部）
○シンポジウム３（10/8）「心と体の調和を促進する統合医療看護」小山珠美（NPO口から食べる幸せを守る会理事長）/松浦信一（松浦歯科医院）/比田井理恵（千葉県救急医療センター看護局）
○シンポジウム４（10/8）「健康長寿社会実現のための統合医療社会モデルと各自治体の地域包括ケアシステム構想」吉田紀子（鹿児島県済生会）/坂本昭文（IMJ鳥取県支部長）

Ⅲ　北海道支部との共催企画（3題）

○北海道支部共催企画１（10/7）「北海道の薬草を活用する」新倉亜紀（アーユルヴェーダビューティーカレッジ代表理事）/山道康子（「山道アイヌ語学校」主宰）
○北海道支部共催企画２（10/8）「北海道の未来の統合医療構想」西谷雅史（日本統合医療学会北海道支部長）
○北海道支部共催企画３（10/8）「漢方を活用した統合医療の実践：西洋医学的概念から中医学的概念に変換することによって著効を示した症例」辻和之（医療法人和漢全人会花月クリニック理事長）
「漢方を活用した統合医療の実践～北海道の食材を活用した食養生～」堀田清（北海道医療大学教授）

Ⅳ　特別企画4分類（22題）

○特別企画１（10/7）「全国支部活動の情報交換会」古賀伸彦（社会医療法人天神会理事長）　他
○特別企画２（10/7）「統合医療の臨床・実践カンファレンス（全人的健康の視点で）：多元主義，プラグマティズムという２つの思想の解説に加えて，実際に遭遇することが多い症状に対して，参加者の皆様と“ジャングルカンファレンス”を展開する」小池弘人（小池統合医療クリニック院長）　他
○特別企画３　「指定交流集会」10題
○特別企画４　「体験型ワークショップ」10題

Ⅴ　一般演題・研究発表　（91題）

○ポスターシンポジウム　11題
○一般口演　41題
○ポスター発表　39題

Ⅵ　企業協賛

○スポンサードセミナー　6～8題
○企業展示　15～20社
○広告・寄付，他

Ⅶ　市民公開講座（2題）

○市民公開講座１（10/7）「整形外科医がすすめる統合医療；骨格メンテナンスとネックササイズ」山田朱織（16号整形外科院長）
○市民公開講座２（10/7）「晩年を考える―生きがい感から身体と精神の行方まで」カール・ベッカー（京都大学「政策のための科学ユニット」特任教授）

Ⅷ　IMJ定時社員総会

○総会（理事長記念講演＆総会）（10/8）
○「100人委員会との意見交換会」（10/8）

Ⅸ　懇親会

○会場　ロイトン札幌　3Fロイトンホール
○2018年10月7日(日) 18：15～20：30
○会費　事前6,000円，当日6,500円
○定員になり次第，締め切らせて頂きます。

寄稿

第6回 日本統合医療学会(IMJ) サマーセミナー2018 in 郡山　報告

｜佐藤　美弥子｜
日本統合医療学会理事

7月14，15日の両日，郡山市磐梯熱海温泉ホテル華の湯において，第6回サマーセミナーが開催された。テーマは「統合医療を受ける当事者としての私－患者である私，生活者である私，人間である私」という大変興味深いもので，今までの提供する側としての立場から視点を変え，今回は当事者として受ける側に回り，医療モデル，社会モデルとしての統合医療を捉えながら，一個人としての視点も含めた内容となった。

仁田理事長からは「医療に対する考え方にも多様性が表れてきている。メンタル，ボディ，スピリット，さらには個人を取り巻く環境なども視野に入れ，統合医療学会がその受け皿となっていかれるように，また日本統合医療学会と上海市中西医結合学会との調印式に出席しての報告や，この会の目的の１つでもある人材の開発という視点から，to know，to understand，to agreeのプロセスを歩んでいかれるよう，実りある会にしましょう」という開会挨拶があった。

第１部の話題提供では伊藤壽記先生からCAMの領域にエビデンスはないといわれていたが，今では1,500を越えるランダム化比較試験に関する論文が取り上げられ，主観的なことをいかに客観的に見ることができるか，いくつかの症例試験を紹介していていただき，統合医療としてこれからも各分野でデータを積み重ねていくことの重要性が示された。

医療を受ける側，患者の家族としての視点から板村論子先生が義父様の体験などを取り上げ，治すことばかりを考えていたが，患者側として死生観を持っていなかったことに気づいたこと，『死を生きた人びと』の著書に

も触れ，オーダーメイドの医療とその対極にあるオートメーション医療についても話題を提供された。

第２部では「社会モデルとしての統合医療」について鈴木清志先生が鳥取県の南部町や静岡県掛川市の例を挙げ，また，「生活者としての統合医療」について，那須町における試みとして，看取りまで視野に入れた活動報告を鏑木孝昭氏が，八ヶ岳における試みとして自足可能な地域社会をめざして，藤井美由紀氏が話題を提供してくださった。

第３部は人気のワールド・カフェ。テーブルごとに4,5人が１グループとなり，自由な話し合いの中から個々の気づきを深めていくもので，①患者である私，②生活者である私，③統合医療を受ける当時者である私について密度の濃い話し合いが持たれた。

３期理事長を務められた仁田新一先生にとって今回は最後のサマーセミナーとなり，猪股千代子理事よりこれからも見守っていてくださいますようにという言葉とともに花束が贈られ，和やかな雰囲気の中，閉会となった。

REPORT

日本統合医療学会と上海市中西医結合学会の国際会議

～日中友好国際交流の新たな歴史の１頁～

｜福沢　嘉孝｜
愛知医科大学先制･統合医療包括センター教授

今回，我々（仁田新一理事長，伊藤壽記副理事長，福沢嘉孝百人委員会副委員長）は，2018年３月20日（火）に日本統合医療学会の友好学会である上海市中西医結合学会を訪問し，日中友好国際交流会議において日本統合医療学会の新たな歴史の１頁を飾る偉業を達成したと考えられるので報告する。

３月19日(月）どんよりとした曇り空の中，中部国際空港（セントレア）から渡中し，浦東空港に到着した（発：13時35分，着：15時35分)。19時頃，上海で

有名な“尚悦樓”に入店し，21時頃まで，翌日の国際会議の戦略コア会議を行ない，疲れを癒やすためにホテルに戻って早目に就眠した。

3月20日（火）霧雨の中，11時頃に中国の名門・復旦大学附属腫瘤医院（Fudan University Shanghai Cancer Center and Hospital）に到着，同センターの中西医結合科・劉魯明教授（中西医結合腫瘤研究所・所長，MD Anderson客員教授）にお会いするのに約30分程度を要した。本医院は近代的ながんセンターとしても有名で，上海でランキングNo.1，中国全土でNo.2との名声を馳せている（病床数2,400床）。しかも米国のMD Anderson病院とも研究・教育面でコラボレーションする病院（多額の研究予算・約５億円を提供されており，優秀な人材の相互派遣をしている）でもある。

その２階と３階のフロアーが劉先生の担当科である。劉先生の外来に辿り着くまでの外来の混雑振りは，まるで東京駅のラッシュアワーの様!?（日本の有名デパートのバーゲンセール並の混雑ぶり）。１日当たりの外来数は約10,000人とのことで，外来担当者数は昇格するほど少なくなるとのことだが，劉先生の１日の診察がん患者は約50人とのことであった。

劉先生を待つこと約1時間，雨という悪天候，外来が長引くなどを考慮いただき，劉先生の秘書が気を利かせ会議室で，お茶・弁当・デザート等を振る舞ってくれたが，何と日本のファストフード風の“牛丼・茶碗蒸し・明治製菓のヨーグルト”だった！「上海に来てまで日本食とは!?」と皆で談笑した。

ちょうど，我々がランチを終了した頃に，劉先生が午前中の外来を終えて会議室に現れ，一緒に団欒を楽しんだ。劉先生は多忙さ故か数口で弁当を平らげ，早速，日中友好国際交流会議・第１弾が開催された。

まずは仁田理事長から，日本のがん医療の現況，統合医療の現況を説明。一方，劉先生からは中国のがん医療の現況・治療法・優秀な人材教育法等を説明され，双方で最新の医療情報交換を終了した。本会議で認識できたのは，中国には３種類の医師国家資格が存在すること，つまり①主に西洋医学を実施する医師（５年訓練期間），②中医学を担当するいわゆる中医師（３年訓練期間），③中西医結合医師（３年訓練期間）の３種類であるという事実であった。また，劉先生の2014年刊行の著書『腫瘤病人の為食事及び養生』は中国語版が100万部を売り上げ，大変ご満悦の様子であった。同書刊行後，患者さんへの病態説明が容易になったとのことである。というのも，担当患者さんは皆，劉先生の書籍を購入・読破しているので，ICが取得しやすいという。

アットホームな雰囲気の中での劉先生と我々とのコンセンサスは「日本統合医療学会（IMJ）監修の下，劉先生の書籍を日本語版に翻訳（１年程度以内）して，日本に紹介・広報してもよい」とのことであった。また劉先生は，中国での抗がん生薬であり，日本統合医療学会認定商品“カイジ顆粒”の中国での優れた臨床成績も紹介した直後，午後診へと向かわれた。

その後，劉先生の愛弟子の陳教授（主任）が代役として，病院内を概略案内してくれた。まずは，①国際整合医学腫瘤中心（International Center of Integrative Oncology：ICIO）を見学した。同センターの登り階段の踊り場には，MD Anderson Cancer Centerとの協定（2004年７月付）を裏づけるオブジェ（透明プレート）が壁に飾られていた。中２階には，初代教授（于尓明先生）から劉先生に至るまでの中西医結合科の沿革写真が飾られていた。

３階にはリサーチセンター（IR）があり，７名のスタッフが論文作成あるいは論文検索に鋭意努力をしている最中であった。そのうちの１人の呉彩軍ナースが，そのセンターでの仕事の概略を説明してくれた。彼女は研究助手の傍ら，上海市科普作家かつ医学人文作家でもある。ICIOには２種類のナースが存在し，①リサーチのみを担当するナース，②病棟や外来でナース業務を担当するナースの２種類である。彼女は前者に該当し，３か月間，MD Anderson病院で研究面での特訓を受けたとのことで，非常に明朗快活でアメリカ人的気質の一面も見られた。

次にCT検査室を案内してくれた。1日20～30人が検査を受け，そのうちの60%程度がE-CTを実施するとのことであった。受検者数が日本と異なり非常に多いので，月～金曜日までは22時頃まで機器をフル稼働させ，土日も夜遅くまで残業をしており，ほとんど休みが取れない状況とのことであった。

時が経つのは早いもので，あっという間に15時15分頃になってしまった。その後，15時45分頃に上海市医師会・会議室（304号室）に到着した。中日整合医学交流活動会議（日本主催なら日中整合医学交流活動）として設営された会場はすでに準備万端の状況で，日中友好国際交流会議・第２弾が開催された。

まず，それぞれ自己紹介，名刺交換から始まった。上海市中西医結合学会側からは，会長の凌昌全先生（海軍軍医大学中医系主任・上海長海中医医院院長・主任医師教授，海軍少将），王文健先生（復旦大学附属華山医院教授・中西医結合学会副会長・上海市中西医結合学会名誉会長），張友根先生（事務局長）の３名，日本統合医

療学会側からは，仁田新一理事長と奥様，伊藤壽記副理事長，福沢嘉孝（百人委員会・副委員長），通訳として株式会社日本漢方新薬社長の丁偉氏の５名が参加した。

双方の学会の特徴に関してスライドでプレゼンを実施した。概説すると，「上海市中西医結合学会」は1981年に設立され，現在の会員数10,033人，医学専門委員会数63，会長１名，副会長２名，年１回の学術大会を開催している。2017年12月７日～10日，第５回世界中西医結合大会（The 5th World Integrative Medicine Congress：WIMCO）が成功裡に開催された。第６回世界中西医結合大会（The 6th World Integrative Medicine Congress：WIMCO, Shanghai, Dec. 6-8, 2018），メインテーマ「結合医学 包容共存（がんとの共存）」にぜひ，お越しくださいとのことだった。

これに続いて，仁田理事長が日本統合医療学会の現況をプレゼンされた。1998年，日本代替・相補・伝統医療連合会議（JACT，代表・渥美和彦先生）として設立された。2000年，日本統合医療学会（JIM）と名称変更され，2008年，日本統合医療学会（IMJ＝JACT＋JIMの統合）として再設立された。個人会員数1,533人，賛助会員32社である。その後，“未来型医療としての統合医療の新しい展開”に関しても強調され，今後は“がんとも共存する時代”であり，周産期より終末期までをシームレスにカバーしていく医療が必要であると締め括られた。到達手段は種々異なっても目指す方向性・ベクトルは同じであるということが双方，理解・納得できた。

最初は緊張した雰囲気であったが，徐々にリラックスした雰囲気になり，談笑へと変わっていった。この状況に小生は徐々に興奮し，先方から準備された果物のパッケージを瞬時に平らげてしまい，さらにもう１つのパッケージが追加され，爆笑を誘った。

なごやかな雰囲気の中で，仁田理事長が「双方，招聘費用を個人負担とし，次年度（2019年度）から日本統合医療学会学術集会内の国際交流セッションを設定（企画）し，数演題をプレゼン・討論しあえるような環境・体制づくりを実施したい」と提案した。王文健先生，凌昌全先生，張友根事務局長共に“快諾”即答の状況で，全員握手を交わし（段上に積み重ね）ながら会議を終了した。

最後に先方の学会雑誌「JIM」（英文誌），DVD（学会紹介用）を日本側の各位に謹呈され，最後にスライドを背景に何回も記念撮影を行った。凌先生の先約他用により18時30分頃，日中友好国際交流会議は閉会となった。

その後，情報交換を兼ねた懇親会へと移動した。21時頃に各自満足気にホテルに戻り，21日早朝の帰国準備のため開散した。

今回，非常にタイトでハードなスケジュールの中，２つの偉業（コンセンサス）が達成されたことは，日本統合医療学会の新たな歴史の１頁として刻印されるものと考える。

①劉魯明先生の著作を日本統合医療学会監修の下，日本語版として発刊すること（日本統合医療学会監修），

②次年度（2019年度）～日本統合医療学会と上海市中西医結合学会とがコラボ開催して，日本統合医療学会学術大会（第22回～）内で，学術連携・国際交流セッションを企画し，正式にプログラム化することが決定した。

この日中友好国際交流会議のコンセンサスミーティングで決定した事項を契機に，今後ますます双方の学会（日本統合医療学会・上海市中西医結合学会）が発展することを祈念しつつ報告を終える。

最後に，今回の素晴らしい学会（ならびに国際的人脈）をご紹介・ご配慮，さらに通訳を担当してくださった株式会社日本漢方新薬の丁偉氏に心より厚くお礼申し上げる。

事務局だより

【学会事業報告】

- ■5月26日　理事長諮問委員会（東京駅八重洲ルノアール貸し会議室）
- ■5月26日　業務執行理事会（東京駅八重洲ルノアール貸し会議室）
- ■7月8日　認定資格セミナー（東京駅八重洲ダイビル第２会議室）
- ■7月14日･15日　第６回日本統合医療学会サマーセミナー in 郡山（郡山市，磐梯熱海華の湯）
- ■7月15日　2018年度第1回100人委員会（郡山市，磐梯熱海華の湯）

【今後の学会事業予定】

- ■10月6日　日本統合医療学会定例理事会
- ■10月7日･8日　日本統合医療学会第22回大会（北海道札幌市）
- ■10月8日　会員総会（北海道札幌市）
- ■10月8日　日本統合医療学会資格認定試験（北海道札幌市）

（文責：事務局長　河野　明正）

編集後記

●いのちの危険につながるような激暑の日々に続く大豪雨は，西日本各地に思いもよらぬ被害を残しました。心からお見舞い申し上げます。三原市では『支援者支援』のための「災害鍼灸マッサージプロジェクト」，『見えないけれど，とても重要な活動』がスタートしました。大変喜ばれていますとか。統合医療学会の真価を発信するためにも，個人的な善意を組織化していくことが急務だと思います。仁田理事長の悲願でもあった学会の本領発揮の足固めから，いよいよ飛躍の段階に歩を進めるには，会員相互の理解と交流が必須です。札幌でお会いしましょう。（川嶋みどり）